新見公立短期大学紀要　第27巻
pp. 187－197, 2006

報告

学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して
—カンボジア研修報告—

岡本　亜紀[1)]*・岡　宏美[1)]・杉本　幸枝[1)]・矢藤　誠慈郎[2)]・難波　正義[3)]

1）看護学科　2）幼児教育学科　3）教養科

(2006年11月7日受理)

本学の学生が国際ボランティア活動について学ぶことができる研修制度の設立のため、我々は、2006 年1月5日～1月9日、カンボジアのシェムリアップ市においてボランティア活動を継続している岡山県に本部を置くNGOを視察した。その団体の活動は、孤児・地雷障害者・母子家庭・エイズ患者の支援プロジェクト、井戸掘り・ジャックフルーツ植樹プロジェクト、および職業訓練施設（子供レストラン技能学校）の運営などである。帰国後、「新見公立短大カンボジア会」を設立して学生メンバーを募った。現在、我々は、支援物資の調達などの国内ボランティア活動、定例ワークショップの開催、開発途上国とそれらの国に係わるNGO(nongovernmental organization：非政府組織)のこと、国際協力に関する啓発・学習などを行っている。本稿では、カンボジアでの現地研修の報告と共に、今後の「新見公立短大カンボジア会」活動について検討する。

（キーワード）国際貢献、NGO、開発途上国、ボランティア教育、大学生

はじめに

国際貢献を学ぶということは、未来の保健医療福祉を担う学生にとって重要課題である。本学においても、国際貢献について学ぶことができる研修制度の設立を考えている。その準備を兼ねて、岡山県に本部を置くNGOの現地ボランティア活動を視察するため、カンボジアを訪問した。帰国後、本学において、「新見公立短大カンボジア会」を設立して学生メンバーを募ったところ、活動ごとに人数は増え、現在、合計14名の学生メンバーとなった。「カンボジア会」では、教員メンバーと共に、支援物資の調達などの国内ボランティア活動や、定例ワークショップを開催して復興途上国やNGOなど国際協力に関する啓発・学習活動を行っている。本稿では、カンボジアでの現地研修の報告と共に、今後の「新見公立短大カンボジア会」活動の方向性を述べたい。

現地研修報告

1．研修期間
2006 年1月5日～1月9日（現地滞在は4日間）

2．研修先
カンボジア、シェムリアップ市

3．参加人数
教員5名、看護学科学生1名

4．研修内容
今回私達が参加したNGOでは、障害者、孤児などの貧困層の自立のために、カンボジアの村々の教育、農業、生活、医療面などの支援プロジェクトを進めている。本研修では、孤児・地雷障害者・母子家庭・エイズ患者の支援プロジェクト、井戸掘り・ジャックフルーツ植樹プロジェクト、

*連絡先：岡本亜紀　看護学科　新見公立短期大学　718－8585　新見市西方1263－2

および職業訓練施設（子供レストラン技能学校）を訪問して、現地NGOスタッフや現地の方と4日間を共にした。その他、公立の小学校と病院を訪問した。

1）職業訓練施設（子供レストラン技能学校）

1月5日午後5時過ぎ、カンボジアシェムリアップ空港到着後、マイクロバスで、夕食を摂ることも兼ねて「子供レストラン技能学校」を訪問した。ここは、NGOスタッフが引き取った孤児たちが共同生活をしながら、レストランで働くための技術や日本語や英語を勉強することができる住み込み式の研修所である。

子供達は朝5時に起きて、自分達の生活は自分達でやりながら、将来、ホテルやレストランで働き自立した生活を送ることができるように、日々勉学に励んでいる。午前と午後に別れて公立の学校へも通っている。この研修所では、規律を守るための厳しいルールがあり、ルールを破った子供は出ていかなければならない。逆に、ここの生活が厳しいため途中で出て行こうとする子供もいる。しかし、出て行くとまた孤児の生活が待っている。レストランでは、私達の他に数名の客も食事をしていた。すべて子供達が調理し客への対応をするが、調理場には指導者（現地の人）の人がいたようだった。

夕食は「スップチュナンダイ」というカンボジア鍋。肉団子、牛肉、菜っ葉、揚げたゆば、麺などが入っている。あっさり味でとても美味しかった。子供達は日本語で、「ごはんおかわりは？」と少し緊張した顔で白米ごはんをよそってくれた。夕食中のNGO代表の話：「政府をはさむと中々動きがとれないから、NGOとしてやっている。政府の中には、子供を労働させているとの批判もある。しかし、孤児としての生活を続けるか、技術を身につけ労働を覚えるか、どちらがこの子供達のためになるだろうか。」

食事後、子供達がみんな集まって歌を歌ってくれた。そして、私達全員にポストカードをプレゼントしてくれた。日本語で「わたしはさびんです。10さいです。」と書いてあり、そしてかわいい花の絵が描かれていた。握手を交わし、うれしそうに何度も笑顔をくれた（写真1）。

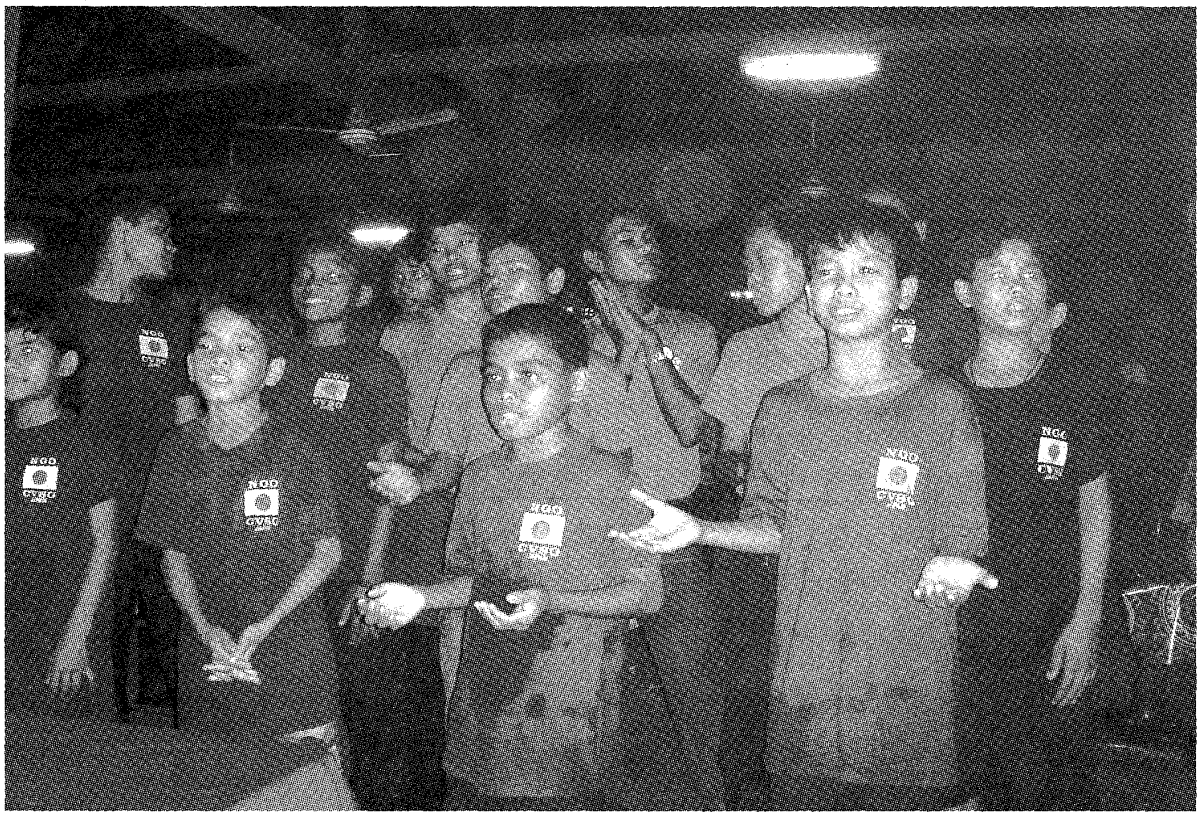


写真1　子供レストランにて

写真２　自立支援村の母子家庭

２）自立支援村

2日目、自立支援村訪問。ここには広い畑と、母子家庭・地雷障害者・孤児が住む各棟と、少し離れたところにエイズ村がある。エイズ村といっても、上に述べた各棟があるところから畑をはさんで離れたところに、高床式の建物が３軒のみ。子供が３人と世話役のような現地の方が建物から顔をのぞかせていた。子供達は、母親が感染者であったためエイズの疑いがあったが、検査の結果は陰性であったということだった。他に、まだ検査をしていない１歳か２歳くらいの子供と、小学低学年くらいの子供がいた。

村では、自給自足の生活を送ることができるように、NGOの支援で畑を作ったりして生活している。子供達は学校へも行っている。子供が成長してここを出ることになったら、母子家庭の母親はここのセンターを出ていかなければならない。ここで覚えた畑の仕事で生活を立てるのか、あるいは、また男性と知り合い、結婚して生計を立てるのか。女性が教育を受け、自立する手段を身につけることができるかどうかに関する情報を私達は得ることは出来なかった（写真2）。

NGO代表が子供達を集めてくれた。リクエストにより歌を歌ってくれる。少し歌わされている感じがしたが、緊張して照れていたのかもしれない。みんな裸足で、上半身は裸の子供や、日本でよく見るキャラクターのプリントのＴシャツやパジャマを着ている子供もいた。午前中に学校へ行っていた子供達も帰ってきて、みんなで集まって日本の歌やカンボジアの歌を歌ってくれた。

普通に生活している子供と、孤児や物乞いをする子供と、カンボジアの子供達には大きな格差がある。貧困、母親の育児放棄、地雷孤児、１回1,000円程度で売られていく子供、３回も売られた子供、中には、人見知りが激しく、自傷行為がみられる子供。人に対して恐怖心を持っているのである。自立支援村の子供達は、体型的には細いのだが、焼けた肌に真っ白な歯を見せて満面の笑顔で、とても人懐こく元気で子供らしい感じがした（写真3）。

３）公共施設（病院、小学校）訪問

州立の小学校訪問。市街にある大きな建物。

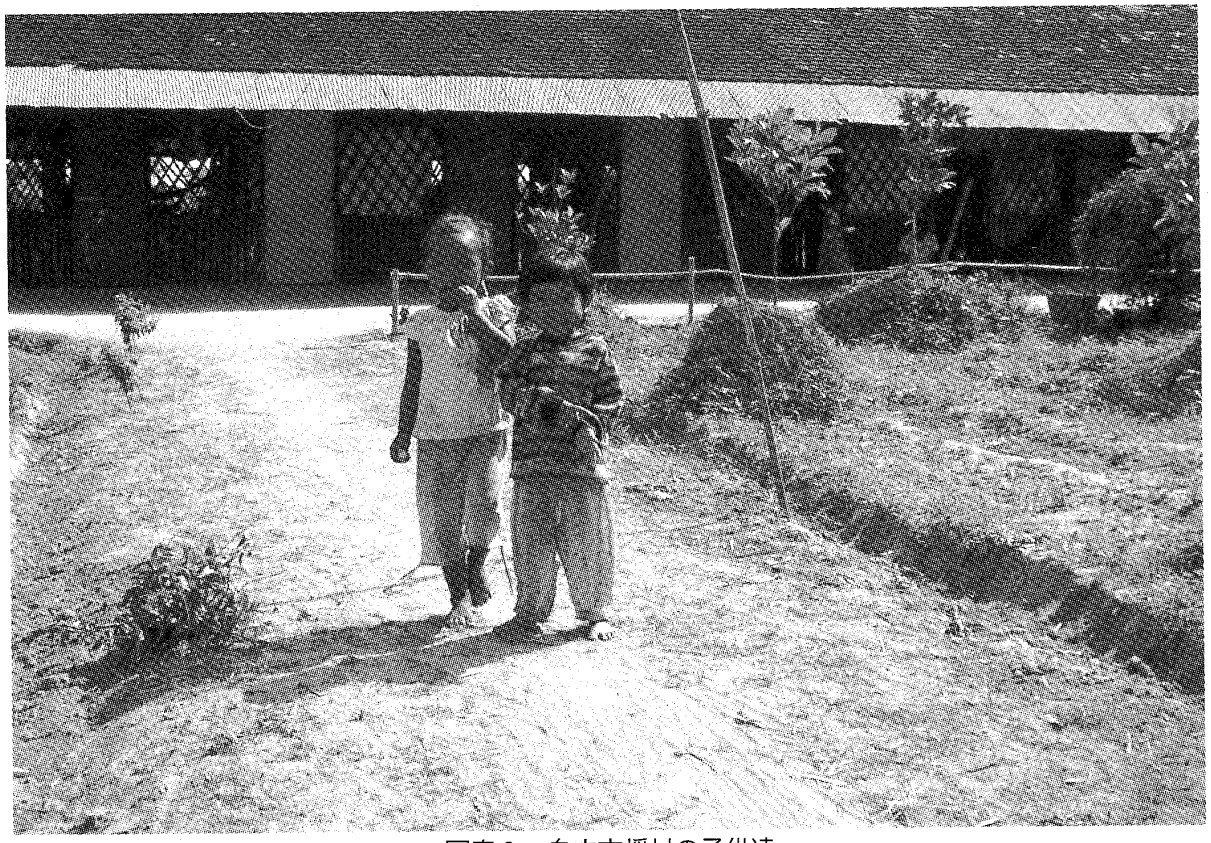


写真３　自立支援村の子供達

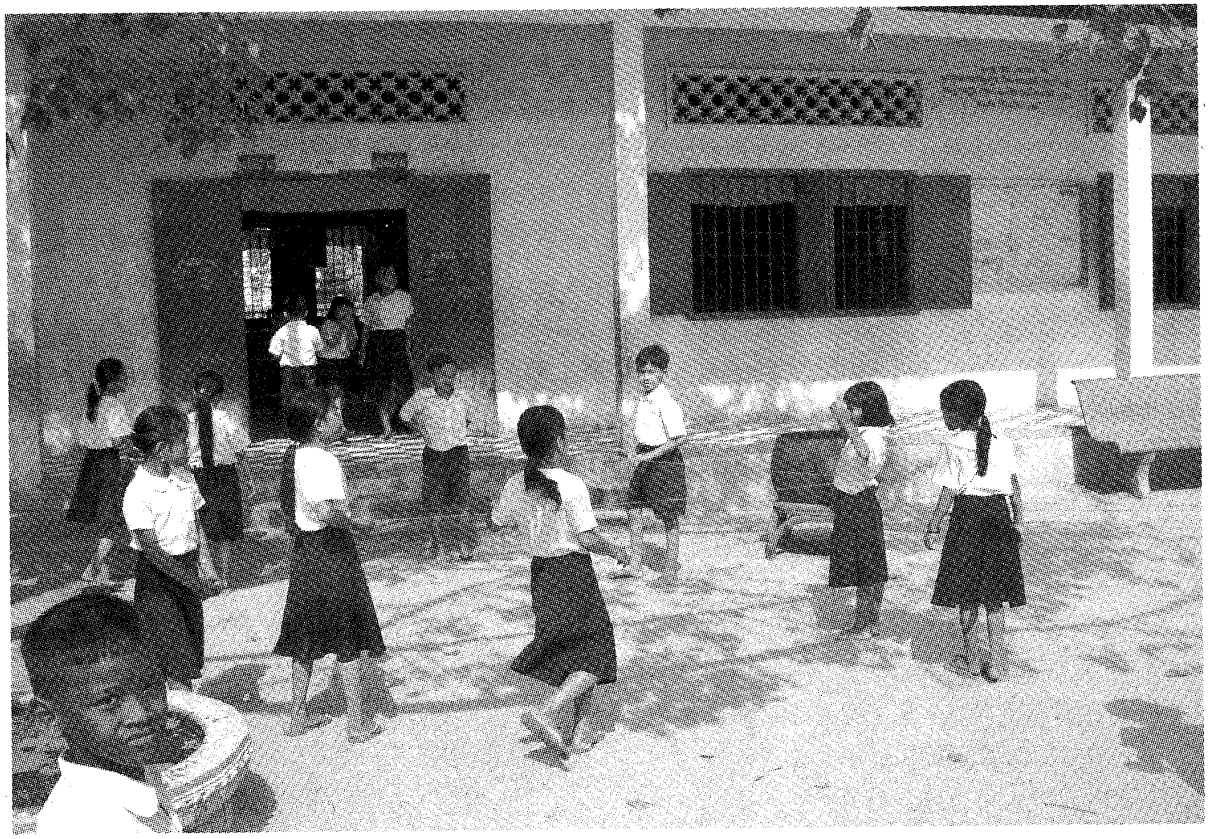


写真４　小学校で遊ぶ子供達

木々に囲まれ、白い2階建ての近代的な校舎に広い運動場、子供達は休息時間だったのか、制服のまま裸足で長縄跳びをして遊んでいた（写真4）。

学校運営に関する政府からの補助は、必要経費の30～40%のみである。運営していくには資金不足で、１ヶ月１ドルくらいを児童から集金している。参考までに、教員の給料は25ドル（日本円で3,000円弱）。カンボジアでの生活は、1日1ドルで普通の生活ができるので、教員などはかなり高額な給料である。1ドルは現地通貨で約4,000リエル、一番大きな紙幣である。ちなみに観光客用の土産物屋では、布製のペンケースや小物入れなどが1ドルから5ドルで売られている。

州立病院訪問。病院職員による案内はなかったため、病院施設や医療制度に関する情報を得ることは出来なかった。写真も禁止された。案内をしてくれたNGOスタッフも初めての訪問であった。芝生の広大な敷地に、病棟一つ一つが一戸建てであり、各病棟につながるあぜ道のようなところを通って、エイズ棟と結核棟へ行った。棟は高床式であり、床下には、異臭漂う沼のような大きな水溜りがあった。10段くらいの階段を登り、靴を脱いで中に入ると、パイプベッドが10台均等に配置されていた。床に座っている者、ベッドに腰掛けている者などで、患者と家族は見分けがつかない状況であった。付き添いという感じではなく、家族もベッドのそばで共に生活している。窓や戸は開放されており隔離された状態ではなかった。

その他、病院には、眼科、精神科、薬局、検査室、輸血室、リハビリテーションセンター、感染症外来、慢性期病棟、産科、婦人科、外科、術後病棟、ＶＩＰ棟などの案内看板があった。術後棟の中を覗いてみると、点滴療法中の患者、酸素マスクを装着している患者がおり、結核棟やエイズ棟と比べると病室らしい感じがした。

ツアーガイドに聞いた情報では、医者や看護師は常勤ではない。患者は、医者に診察などのたびにお金（賄賂）を渡しているらしい。訪問した病院は一般的な公立の総合病院である。市内にはその他に個人病院がたくさんあり、個人負担はかなり高額で、裕福な市民が利用するとのことであった。

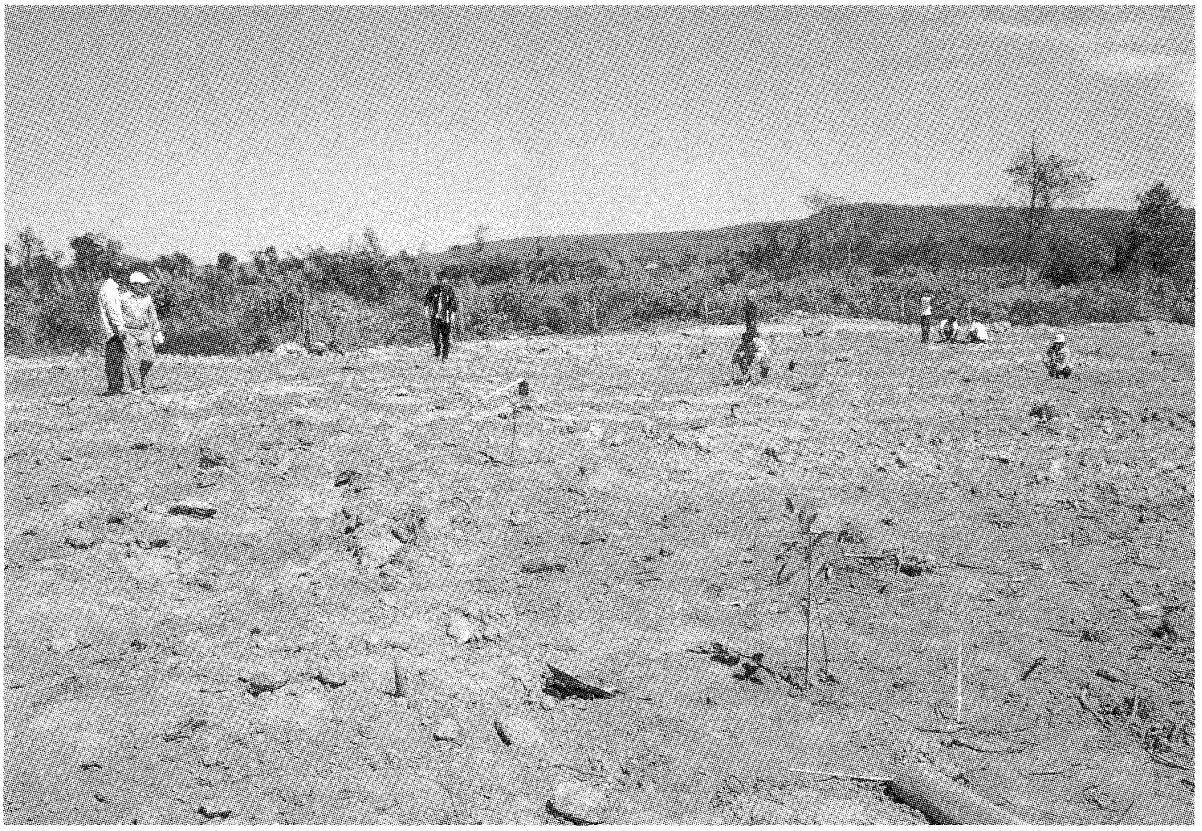


写真５　ジャックフルーツ園

4）自立村

3日目、自立村を訪問。市街地からはかなり離れている。通勤中であろうか、朝からスクーターや自転車で長い道のりを移動している大勢の人々が、私達のマイクロバスと対向してくる。

自立村と、先に述べた自立支援村には大きな違いがある。自立支援村で農業や職業を得るための支援を受け、自立して生活ができる準備が整ったら自立村へ移住する。自立村では住居のみ提供され、その他の支援はほとんど受けていない。自立村の入り口から歩いて30分くらいのところに、カンボジア最大の開墾中のジャックフルーツ園がある。まだ全くの荒地で、見渡す限り青空が見える広大なフルーツ園である。ここで、ジャックフルーツ苗の植苗と井戸掘りを体験した（写真５，６，７）。

日差しが強く、かなり暑かった。フルーツは育つのに4年かかるというが、カンボジアの名産物である。自分達で育て、自立村での生活を支える。フルーツ園までの道沿いには、ＮＧＯが提供した住居がある。野良犬に、野生化した鶏、ひよこの

写真６　ジャックフルーツの苗

写真７　井戸掘り

群れが見られ、そして村人達は笑顔で、手を振って出迎えてくれた（写真８）。

村の中に小学校がある。今回の研修では岡山県内の中学生も同行していた。自立村の子供達と縄跳び、鬼ごっこなど、広場いっぱいに広がって遊んだ。輪の中で元気に遊ぶ子供、輪の中に入りたそうにじっと見ている子供、声をかけると泣き出す子供、そんな子供達を片手で抱っこしてうろうろしている子供、様々であった（写真９）。

言葉は分からないが、日本の中学生とカンボジアの子供達、そして私達も一緒になって遊んだ。折り紙をしていたらあっという間に子供達が集まってくる。皆興味深々、鶴を折ると笑顔を見せる。手本を見せながら一緒に折っていると、何か言ってくるがわからない。少し笑いながら、難しそうな顔をして一生懸命に折り紙を折る。「わからないよ。」「私にもちょうだい。」と言っているのか。皆でいくつか鶴を折ってあげた。どこからか折り紙の紙飛行機が飛んできた。その先にはうれしそうな男の子がいた。

5. 私達にできること

高度な科学技術の発展を受けながら、日本は、日常生活は豊かに、便利に変化し続け、今や世界有数の長寿国になっている。一方で、現代生活の変化に伴い、人生観、価値観も変化し続ける。しかし、わが国が抱える問題は多い。婚姻率や出生率は年々減少を続け、少子高齢化は加速する一方である１）。疾病構造では、現代病と呼ばれる生活習慣病や精神病が増加している。家族形態の変化、介護問題、生産人口の就業率の低下や離職率なども含め、解決しなければならない問題は山積みである。生活が豊かになり、人生に余裕ができた今、このような諸問題には、国民一人ひとりがそれぞれの問題について立ち止まり、情報を得て、自分の考えに責任をもって行動することから解決への道は始まっていくのであろう。

しかし、経済大国日本が抱える今日の問題と、開発途上国が抱える問題は大きく違っている。わが国のような豊かさゆえの様々な問題に直面している同時代に、未だ貧困、飢餓、疾病が残ってお

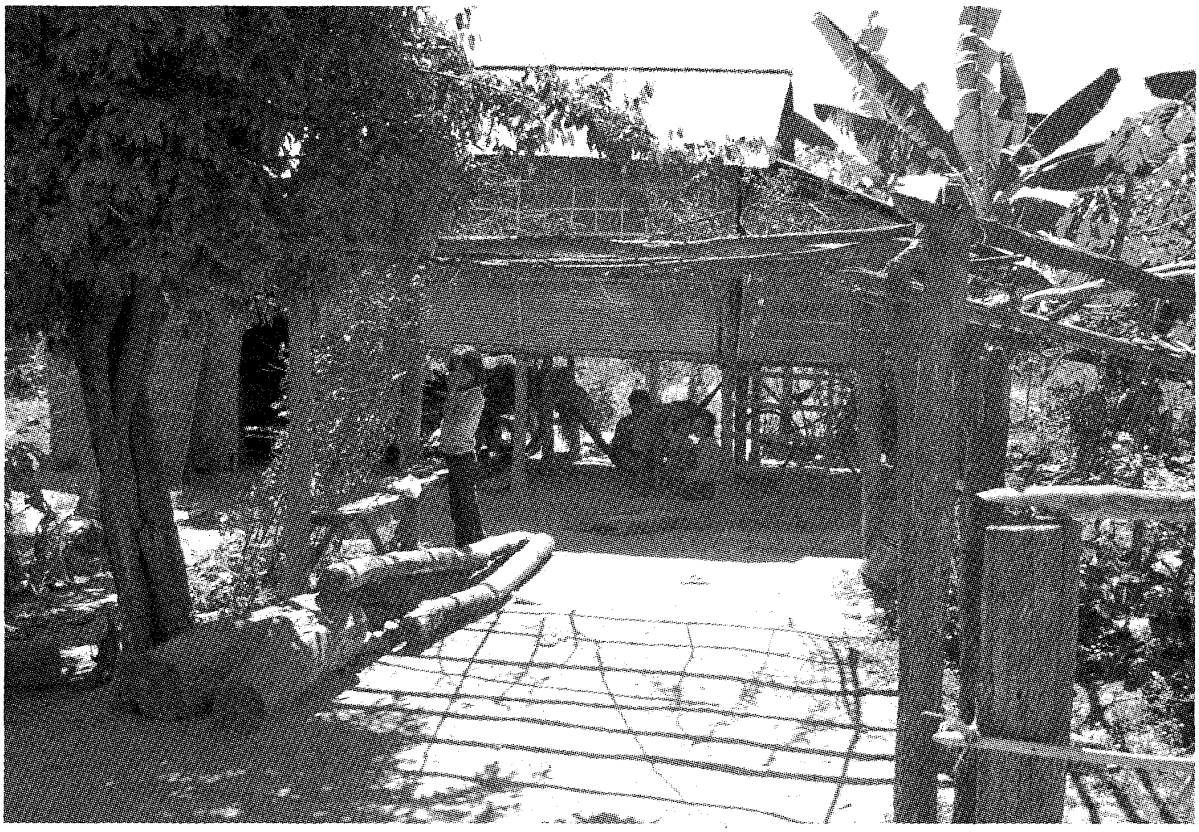


写真８　自立村の住居

写真９　自立村の子供達

り、適切な保健医療サービスの恩恵を受けることができない人々、毎日生きていくことさえ困難な人々が世界人口の半分以上を占めているのである。彼らの生きる目標は、食べて生きていくことである。彼らは、貧困のため学校に行かず毎日働く。教育を受けることができないので働くといっても特別の知識や技術を持たない。働くことができないので、貧困のまま、その極端に限られた生活の中で日々を過ごしている現実がある。

従来から海外で活躍することは、若い世代の憧れであり、「将来は海外協力隊に行きたい。」「開発途上国で看護師をしたい。」などの声は、看護学生からしばしば聞こえてくる。それは、国際貢献とはどんなものであるかは明確ではなくとも、「国際」という魅力的な言葉、「貢献」という使命感の強い言葉は、海外で活動するという、学生自身が将来像に思い描く夢や希望となるのだろう。将来、国際貢献の場で活動することを夢見る学生は、貧困や飢餓が残る開発途上国の現状をどのように知り、どのように感じ、どのように考えるのか。

国際貢献活動の単位は、国から個人まで様々である。方法も、途上国が必要としている多種多様な分野での大規模な活動や、また、今すぐにでも実行できる小規模な活動から様々である。民間では今日、数多くのNGOやNPOがそれぞれの立場で、それぞれのやり方で活動を行っており、彼らの活動する分野や範囲は制限されることはない。使命感に燃えた人々が各国から押し寄せてくるのである。同一国に数多く散在するNGOやNPOの中には、独自の価値観や正義論をもって、活動を継続する団体は後を絶たない。一方、途上国が必要としているものは何か、一番大切なことは何かを考えず、自分の立場や役割が明確でない、自分本位の過剰なボランティア活動は、開発途上国の人々の生活を巻き込んで思わぬ混乱をもたらす。国際貢献は、「国際論」「経済論」「人権問題」「正義論」「ジェンダー」など、あらゆる分野から捉え、慎重に活動しなければならない多くの問題を含んでいる。経済大国日本の学生は、開発途上国に何を見るだろう。何が正しくて、何が間違っているのか、正解などないように思うが、学生達に

は、国際貢献の“光と影”を知ってほしいのである。

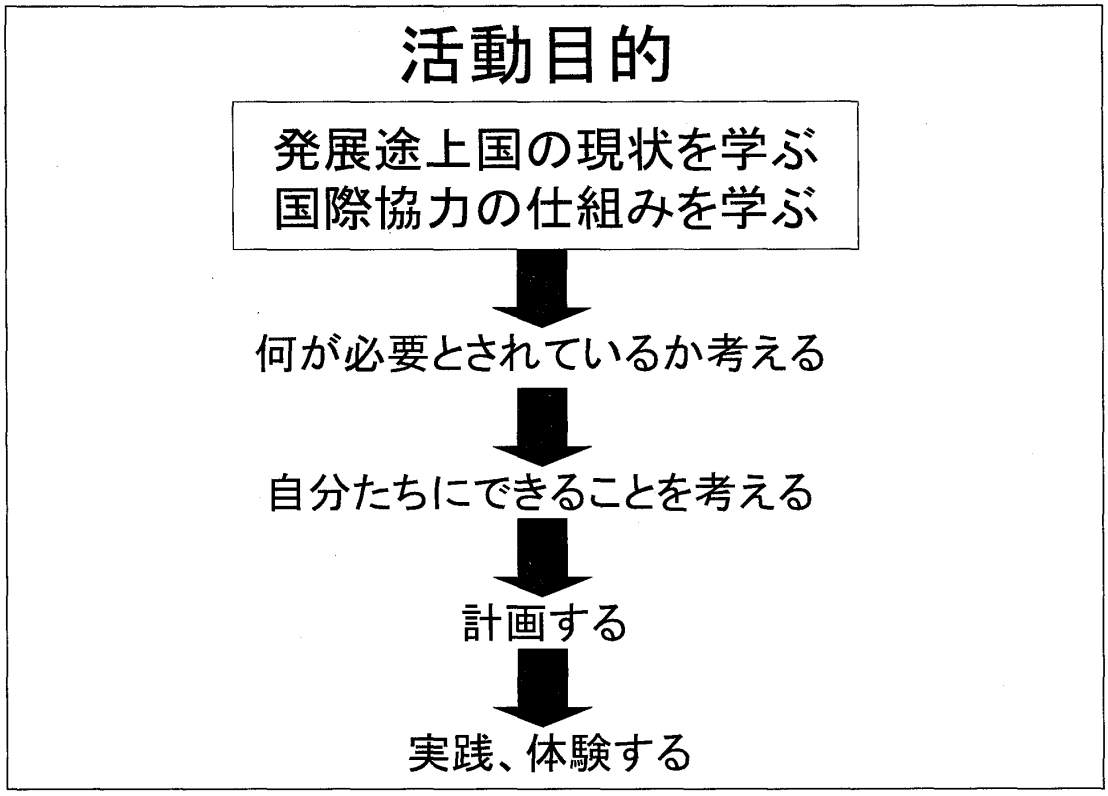
参考資料１．活動目的
参考資料２．学生が「この会でどんなことを学びたいか」
参考資料３．学生が「この会に参加した理由」

註
1）（財）厚生統計協会編：厚生の指標　国民衛生の動向．P35-76、2005.

Attempts to Educate our Students for International Volunteer Work
－Case Report of Cambodia－

Aki OKAMOTO, Hiromi OKA, Yukie SUGIMOTO, Seijiro YATO[1], Masayoshi NAMBA[2]
Department of Nursing, [1] Department of Early Childhood Education, [2] Department of Liberal Arts

Summary
We are helping students to learn International Contributions on our own college program. At the beginning of that, we visited The Kingdom of Cambodia to inspect Japanese NGO (nongovernmental organization) for 4days. We have got much experience there and learned how participants in NGO could support a mother-and-child family, orphans and mine disorders. After we came back here, we have established an activity group in our college. We report here the possibility our Cambodia study tour, various activities with our students and how we can make our students understand matters of International Contributions.
Key Words: International Volunteer, NGO, Developing Country, Volunteering Education Program, College Student



参考資料１　活動目的

「この会でどんなことを学びたいか、
どんなことをやっていきたいか」

・募金活動をしてはどうか
・お金を集めて、どこかの団体にあげて学校設立・地雷撤去などに使ってもらう
・NGOのことを知りたい
・カンボジアの歴史、情勢、国について過去や現在のいろんなことを知りたい
・このNGOはなぜカンボジアなのか、他の国はやっていないのか
・政府はやっていないのか
・子供たちについて深く学びたい、地域格差、生活、勉強
・何ができるか調べて実行したい
・カンボジアには難民ばかりなのか、経済格差はどうか
・生活について知りたい

参考資料２　学生が「この会でどんなことを学びたいか」

「この会に参加した理由」
・国際協力、JICAに興味あり、保育の側面でかかわりたい
・将来子供の教育にたずさわる人間として世界のことを知りたい
それを伝えて日本の子供たちに知ってもらいたい
・高校生のときルーマニアAIDS孤児の支援(AAA)についての
勉強会やフリーマーケット、募金活動、小学校に行って教育をしていた
・海外に興味あり、アメリカやオーストラリアの研修にも行きたい
・JICAに興味あり、医療がとどかないところで働きたい
・高校生のときフィリピンへの支援として学校で小学校設立の支援
にたずさわった(募金活動など)
・海外に興味あり、アジア、ヨーロッパなどの文化など知りたい

参考資料3　学生が「この会に参加した理由」